

苦手な科目に苦悩…「強み」を生かせ

「経営学の父」と呼ばれるピーター・ドラッカーは、自らマネジメントの概念を確立した。70年以上も社会に影響を与え続け、今なおその影響力は衰えていない。ドラッカーの言葉には「この考え方を経営者や管理職が実践したら、メンタルヘルス問題も少なくなる」と思うものがしばしばある。

これを、経営者・管理職を「教師」に、仕事を「勉強」に置き換えて考えてみようと思う。

勉強の仕方は人それぞれ。それが結果につながらなければ変更が必要だが、結果が出ていれば勉強の仕方は問われないことが多い。登山でいえば山頂までのルートが違うだけだ。一方、「勉強の仕方の変更が必要だ」と教師が指導しても、本人の個性に合わなければ、変えられなかったり、うまくできなかつたりする。勉強の仕方には本人や周囲が気づいて修正できることと、個人の特性となっていて変えられないことがある。本人と周囲がそれを見極めて、本人に合った勉強の仕方を取り組めば、結果は上げられる。心身にも良い影響が出るはずだ。

■基礎を学ぶことに疲れて：たとえば数学が得意ではないとき

こんな話がある。新しい単元に出てくる用語が分からない。分からないばかりか言葉自体が外国語のようで聞き取れない。塾の補習を受けたり、参考書を読んだりして理論の理解は進んできた。しかし、その理論が今の勉強にどうつながっていて、どう応用していいかは今ひとつ分からない。基礎勉強にばかり時間をかけていると、周りが自分のことをバカにしているのではないかと疑心暗鬼になってくる。教室に居ても緊張が続き、首や背中に痛みが出るようになった。

そのころ、数学が多少得意の先輩が様子を見てくれた。思い切って、どうやって勉強したのか聞いてみたところ、思わぬ答えが返ってきた。

「俺も関数や図形の原理などはよく分かってないんだ。でも法則といっても、よく使うものはたくさんあるわけじゃない。解き方を知れば、原理が分からなくても答えは出てくる。要は結果が出るのが大切で、プロセスは分からなくてもいいんじゃないか」と言われたのだ。「プロセスは分からなくてもいい」という言葉は意外だったが、とても気が楽になった。

■インプットではなくアウトプットから考える

ドラッカーは「強みを生かし、得意な部分を伸ばすこと」を様々な形で勧めている。とは言え、学校生活をする限り、「得意なことだけやる」というわけにはいかない。得意でないことをするのは気が進まず、「やらされている」と感じるほどストレスは高くなる。結果を出す前に数学に対する苦手意識から必要以上に構えてしまい、何とか追い付かなければと勉強を始めたのだが。

しかし重要なのは問題を読み解いて答を出すことであって、解法のパターンさえ分かれば結果が出せるものも多い。よく使う代表的な問題をまず覚えて場数を踏み、自信がつけば、「戻って基礎を学んでみよう」という気持ちの余裕も生まれる。ドラッカーは勉強を生産的なものにするために、「結果すなわち勉強からのアウトプットを中心に考えなければならない。原理や知識など勉強へのインプットからスタートしてはならない。それらは道具にすぎない」(『マネジメント[エッセンシャル版]』)と述べている。

現実には、原理が分からなくても、答を出さなければならぬこともあるし、アウトプット

がインプットを促進する良い循環になることもある。ここでは、まずアウトプットを出して勉強を進捗させ、自信を得てから勉強のプロセスを確立するのが望ましい例といえる。

■変えられない「勉強の仕方」に着目する

ときには、このやり方でないと「生産性が上がらない」「どうも自分には居心地が悪い」という、性格やそれまでの記憶や行動が基となった勉強の仕方もある。勉強上の個性とも呼べるもので、ドラッカーは「勉強上の個性は、勉強に就くはるか前に形成されている。それは、修正できても変更はできない。ちょうど強みを発揮できる勉強で成果をあげるように、人は得意なやり方で勉強の成果をあげる」(『明日を支配するもの』)と述べている。

教育マネジメントにおいてはそれを知っておくと役に立つ。今回は『プロフェッショナルの条件』でドラッカーが「勉強の仕方」について言及した幾つかを取り上げて考えてみよう。勉強の仕方には次に挙げる得意な「どちらか」があり、それに合わせて勉強をすることが成果につながるとしている。

1. 読む人間か、聞く人間か

「読んで理解する」か「聞いて理解する」かに得手不得手がある。これが分かっているならば教師が指示する場合、口頭がよいのか、文字で指示するのがよいかを使い分けられる。また、なぜミスが多いのかも、問題の読み取りの中心がどちらにあるかに注目すると分かることがある。生徒の理解の仕方がどちらかを見極めよう。

2. 人と組むのがいいか、一人がいいか

他人と相互に意見を交わし刺激し合いながら成果を上げていく人もいれば、一人で考えを突き詰めることで成果を上げる人もいる。人と組むのがいい人は、人との接触と発話量が多い。ポイントは、人からエネルギーをもらうタイプか、それとも人というエネルギーを消耗するタイプかを見極めることだ。これが分かると、勉強の雰囲気作りやチーム内のフォーメーションを決めるときに役立つ。人と組むにしても、どの程度の規模や距離感が心地良いかもその人によって違うので注意しよう。

3. 緊張感がある方がいいか、安心する方がいいか

緊張感がないと気が緩んで成果が上がらない人がいる一方で、緊張すると本来の力が出せない人もいる。一般的に、適度なプレッシャーがあった方が成果は上がることが知られているが、この「適度」は人によって異なるので個別に見極めることが必要だ。制約が多い勉強、時間的に厳しい勉強、急な変更が多い勉強、ミスが許されない勉強に対応するときの生徒の反応を観察してみるとから始めよう。

4. 自分で決める派か他人の言葉を求める派か

自分で決めることは得意でなくとも知識があり、それを他人に伝えることで最高の勉強ができる人

もいる。これも組織を構成し、成果を上げるには重要な視点と言えよう。

勉強の仕方の「どちらか」は、「得意でない方はできない」という意味ではなく、「得意な方がより成果が上がる」ということである。

教師が生徒の「どちらか」を見極めて実行するために、生徒の名前とこれらの「勉強の仕方」を並べてどちらに当てはまるか○をつけたリストを作成してみるとよいだろう。そのリストを作ろうとする過程でマネジメントの質が上がる。どちらに○をつけるか判断するために、これまで以上によく見て、よくコミュニケーションをとることが必要になってくるからだ。もちろん、見立てを間違えることもある。そんなときには逆を試してみる。何しろ選択は「どちらか」二つしかないので逆のほうでよい。こうした見極めを実践すると、「勉強の仕方」が個別に違うことを改めて認識するはずだ。

多くの教師は自分の成功体験を基に生徒の育成や指導をしがちである。それ自体は否定しないが、それだけだとそれ以外の勉強の仕方に目が行かない。ドラッカーは「勉強の仕方」の実例を挙げると同時に「驚くほど多くの人たちが、勉強にはいろいろな仕方があることを知らない」（『プロフェッショナルの条件』）と指摘している。私たちが多様な「勉強の仕方」があることを知れば、生徒の勉学進捗とメンタルヘルス向上につながるに違いない。